

デザイン教育機関蔵書に見る図案集

——東京美術学校・東京高等工芸学校・京都高等工芸学校

森 仁史

はじめに

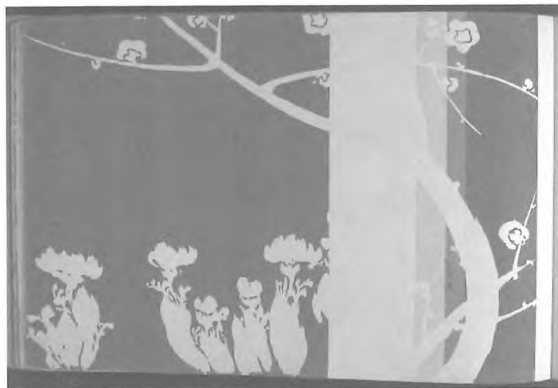
本共同研究は各地に散在する図案集をデザイン史研究の観点から確認調査することを主要な目的としているが、筆者の関心は我々が調査し得たうち、戦前の日本を代表するデザイン教育機関が所蔵する図案集を通覧し、その傾向と歴史的動向を探ろうとすることにある。これらの学校は現在も夫々が大学として存続している。現在各付属図書館が所蔵している図案集がかつて所蔵していた図案集のすべてであるとすることはできないが、過去の姿を類推するためにも、現状を把握しその輪郭をつかんでおけば明治デザインの転機に迫ることができると思われる。

そこで、差し当たり本稿では各学校の図案集の所蔵情況とその傾向を概観し、特徴的な事項について若干の考察を加えることとする。こうした調査はこれまで全く行われてこなかったが、それはこうした図案集は時々需要に応じて出版され、それに基づく制作時機が過ぎれば忘れ去られる存在であったからだろう。しかし、最近になり我々の調査のほかに、千葉大学附属図書館による「日本近代デザインデータベース」構築プロジェクト（平成十一年）や代表的なデザイン雑誌や全集の復刻——『図按』（国光社 明治三十四年）、『現代の図案』（深田図案研究所 大正十一年）、『現代日本商業美術全集』（アルス 昭和四年）など——にみられるように、日本近代デザイン史への関心は着実にたかまっている。これらは明治以降の日本近代の諸相への実態的な解明を求める問題関心から発する歴史把握に基づくものと思われる。それは日本の近代デザインの基本が単に西欧模倣と手本たる西欧からの後進性によって計ろうとする歴史観からの逸脱であり、さらにまた近代日本美術の展開に隠された固有の文脈を見いだそうとする研究動向と軌を一にしており、本稿もこれらの考察に幾ばくか貢献しようとするものである。もちろん、これらの成果がやがて日本デザインの来るべき進路や方

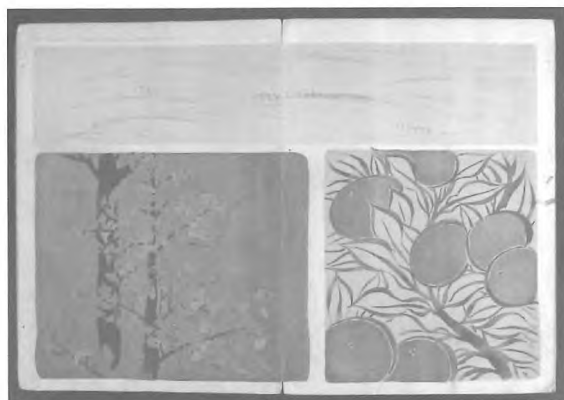
向を導き出すことを予期すべきであろうが、この図案集の調査研究はそれに対して迂回して応えようとするであろう。すなわち、デザインが「どこからきて」「どこにいるか」の究明だといえる。⁽¹⁾

一 各校の蔵書構成

ごく大雑把に言つてこれまでの研究成果によれば、明治維新以降政府によって積極的な美術振興策が展開され、その美術の骨格は伝統的図柄や主題の強調、即ち日本絵画の伝統的主題と表現の工芸作品への適用であった。⁽²⁾それは日本における〈美術〉分野の創生がナシヨナリズムの発露から発していることとともに、成長しつつあった産業のデザイン活動（明治にはまだこの名称は一般的でなく、日本では戦後になってようやくデザインという用語が定着する）の形成と指導への助走でもあった。従つて、明治初期のデザイン活動は起立商工会社（明治六～二十四年）、内務省製品画図掛（明治九～十八年）に留まらず、それを引き継いで納富介次郎、塩田眞が創設した江戸川製陶所（明治十一年創設）や川原徳立が経営した瓢池園（十二年創設）、納富が校長を務めた初期の工業学校（明治二十年石川区工業学校）と続くが、明治二十年代には低調となり、三十年代に入つてナシヨナリスティックな美術政策の退潮と交替して実業教育の分野でデザイン指導が展開される。即ち、制度的には明治二十七年の実業教育国庫補助法、三十二年の実業学校令によってその財政的制度的基盤が保障され、府県レベルでの工業学校（明治二十九年栃木県工業高校・京都市美術工芸学校、三十六年東京府立染織学校、三十九年東京府立工芸学校、四十四年神奈川県立工業学校・愛知県立瀬戸陶器学校など）が設立され、それらへの指導者供給機関として明治二十七年に東京工業学校敷地内に工業教員養成所（金工・木工・染織工・窯業・応用化学科）が設立され、ここに明治三十年に工業図案科が追加設置されたのだった。⁽³⁾同所は尋常小学校卒業生以上が入学資格で、二年制であった。二年後には東京工業学校（旧制中学卒業が入学資格、三年制、三十四年～東京高等工業学校）にも工業図案科が設置された。他方、明治二十九年四月に創設された農商務省商品陳列館（当初は貿易品陳列館。初代館長は塩田眞）は同省海外実業練習生（明治二十九年十名派遣で開始）や在外公館を通じて世界各国のデザイン情報や商況の集積とデザイン事情の紹介に努め、工房や事業所に実際のデザイン指導を展開した。同館において明治末から始まった商品改良会や京都三園（遊陶園・京漆園・道



挿図2 神坂雪佳『ちぐさ』第一



挿図1 古谷紅麟『こうりん模様』下

楽園）展覧会は伝統産業や軽工業に輸出産業としての自立を促すことになった。

これらの指導は製品画図掛の第一世代から、平山英三（明治六〇一年ウィーン留学）、井手馬太郎（明治二十九〇三十二年ロンドン留学）らの第二世代へと引き継がれていた⁴。かれらはヨーロッパ留学体験を通じて実地に産業構造のなかで機能するデザインの役割と意味を知悉していた。その実践はただ日本美術の優位性を誇示するだけではない現実を見ていた。なぜなら、伝統的であることで日本製品の魅力を発揮できたジャポニスムの時代はもう過ぎ去っていたからだ。十九世紀末に日本製品に求められたのは日本製品の独自性と同時に工業製品としての普遍性であった。製品として流通するための器形の普遍性は輸出品に欠かせない基本要件であり、デザインが市場の嗜好を反映させ先取りすることはさらに重要であった。こうした実践を維持するためには、当然ながら世界動向の把握とそこで通用する表現の独自性を達成しなければならなかった。明治三十年代以降盛んになる図案集の出版はこうした要請に応えようとするものと考えられる。

このような図案集の出現に至る情勢の変動を踏まえて、各校の蔵書構成を次に検討してみる。

i 東京美術学校（東京芸術大学美術学部）

東京美術学校は岡倉覚三（天心）の構想を実現したものであり、先述の美術国粹主義の中核たらしめていた。明治二十一年の東京美術学校規則では、専修科として絵画・彫刻・図案科と建築科を置くことにしていたが、二十三年の規則改正で図案科は美術工芸科とし当分は金工と漆工を教授することとし、建築科は欠けたままとされた。つまり、明治政府の殖産政策に沿った路線にのつとるなら、当然製品の図案教育は真っ先に推進されるべきであったが、岡倉は事実上これを棚上げし小川松民、海野勝珉竹次郎、岡崎雪声（庄次郎）らの伝統保守の作家を雇い入れることにしたのであった。その後、二十九年に西洋画科とともに図按科が追加設置され、福地復一（明治十年津師範学校卒業）が科長となり横山秀麿（大観）が助教授となつて、正課としての図案教育が開始された。翌年、美校騒動の渦中で福地は辞任し、塩田眞が後任となつた。更に明治三十五年に島田佳矣（明治二十七年東京美術学校絵画科卒業）が東京高等工業学校助教授から転任し、その後長く科長の職にあった⁵。かれらの図案教習は当然ながら九鬼・岡倉の国粹路線のうえにあり、福地は図案科の目標を「第一



挿図4 津田青楓『染織図案』上



挿図3 下村玉広『元禄風流 明治振』下

に時代の様式なり次には嗜好の異同なり次には建築装飾に関する者なり」と説き、伝統的な図柄や有職の研究を第一義としていたのだった。短期間ではあったが、初期の美術学校における図案教育を推進した福地の収集した資料は天香遺物として一部が図書館に収蔵され、『更紗図譜 天・地』や「四季山水裾模様ひなかた」など江戸期刊本一点と墨書、彩色の写本六件、明治期刊本の計八件がこの調査でも確認された。まだ刊本の少ない時期に、教授資料として収集したものである。また、彼の教え子河邊正夫は明治三十二年卒業後、三十四年に助教となった。

これらの事情は現在の附属図書館に残された図案集の保存状況からも読み取ることができる。所蔵図案集のうち刊行年の明記してあるものは元禄十四（一七〇一）年から昭和十八（一九四三）年まで三百十六件で、これらを一応次のように区分してみよう。

元禄十四～安政二年	十一件
明治三～三十二年	五十四件
明治三十三～大正十二年	百七十件
大正十三～昭和十五年	八十一件

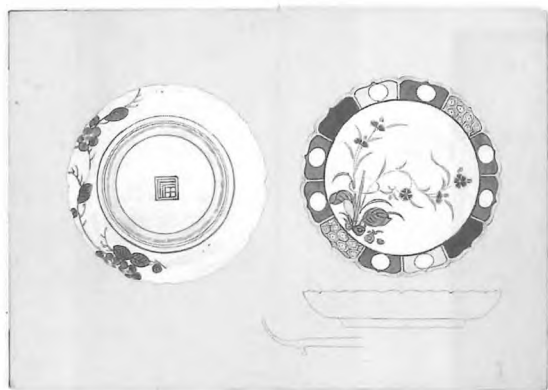
一見して分かるように、明治期に先述の工業図案科設置の年までの出版件数に対して、日清戦後から関東大震災までのわずか二十年余の期間に三倍近い件数にのぼり、全体でも五十二%を占めている。本報告の岩切論文が指摘するように、明治後半が商業出版としての図案集の発行のピークをなしていることが分かる。このうち芸艸堂を中心とする木版によるものが九十三件を占め、半数を超えている。蔵冊数の多い順に作家とその図案集を収挙げると以下の通りであるが、これら内容を見るとの多くが染織業者向けの図案集であることが分かる。

古谷紅麟 『縞千種』上・中・下（明治四十二年）「挿図1」ほか九件

神坂雪佳 『百々世草』（明治四十二年）「挿図2」ほか五件

下村玉広 『元禄風流 明治振』（明治三十八年）「挿図3」ほか二件

このほか、若き津田青楓の『染織図案』（明治三十七年）「挿図4」も所蔵本に見出される。同じ染織図案で



挿図6 『帝国博物館蔵観古美術展覧会出品写』
陶磁器之部



挿図5 山田清作『友禅ひながた』一

あっても、他と比較して津田の斬新さが対照的である。また、印刷技法としてコロタイプ刷りによる図案集もこの時期から出現し、これは制作展示された染織品を写真撮影してその図版を掲載することに用いられることが多かった。この場合には反物や着物を掲載する染織界のものが多く、こうした出版状況には京都の産業界の影響力の大きさが窺われる。京都の織り元と結びついた作家は関東でも桐生や東京などに数多く散在していた。こうした所蔵傾向からは、同校図案科が一九〇〇年パリ万博において日本の輸出工芸品に手厳しい評価が下されたあとも、依然として伝統的なデザインソースもしくは擬似古典の現代化に執着し続けた姿が浮かび上がってくる。この点は次に見る東京高等工芸学校とは対照的である。そのことは、福地復一以後の図案科指導者であった島田佳矣、田辺孝夫らの志向のしからしめるところなのだろう。同時に、古美術研究が進展するに従いそこに図樣意匠研究としてこの領域が組み込まれていく。こうした傾向はその後の昭和に入っても山田清作『友禅ひながた』全四冊（昭和元年）、「挿図5」、上野清江『古今模様大監』全七冊、河邊正夫『日本装飾大監』（昭和四年）のような伝統工芸や伝統的装飾研究への志向が強い出版も続いている。ここに残された図案集には、昭和初期に図案の世界にたかまった前衛美術や民衆芸術などへの関心を示すものが少ないようだ。一九二五年パリ装飾博覧会で審査員を務めて帰国した金工科の津田信夫とその学生たちが新しい造型や室内装飾に積極的に取り組んだのとは対照的に感じられる。

ii 東京高等工芸学校（千葉大学工学部）

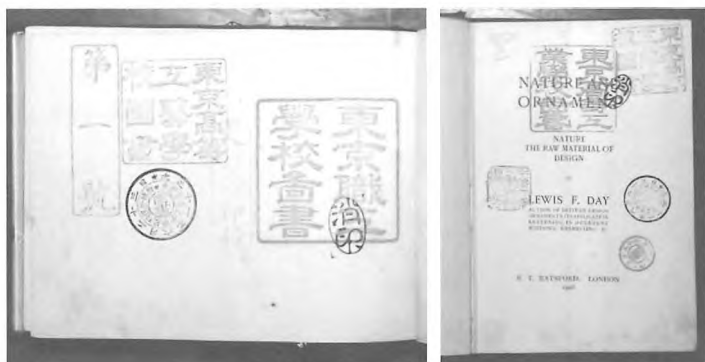
この学校の所蔵図案集は刊行年から言えば、明治二十八年から昭和十一年に及んでいる。しかし、明治十四年創設の東京職工学校以来の蔵書が含まれていることは次のような明治初期の殖産政策の産物とも言うべき図案集の所蔵からも窺うことができる。

『帝国博物館蔵観古美術展覧会出品写』 陶磁器之部・玉石之部・漆器及金属之部・蒔絵之部〔挿図6〕

『帝国博物館蔵温知図録拔写』 金属之部 天・同 地・蒔絵之部・彫刻之部・漆器之部

『温知図録拔写』 陶磁銅七宝器之部 全・漆器之部 下巻〔挿図7〕

『帝国博物館蔵宮内省金器各種縮図写』



挿図8 『小学普通画学本』(左)、
"Natural Ornament" (右) 扉ページ



挿図7 「銅製蓋物真形図」
([温知図録抜写] 漆器之部 下巻)

『温知集』

山高信離撰 松下久吉・長命晏春画 『工芸百図』 明治十三年 山高信離

このことはこの蔵書が大正十年の東京高等工芸学校創立以降だけのものでなく、もっと古い時期から形成され始めたことを物語っている。実際に、蔵書によつては職工学校、東京工業学校、東京高等工芸学校の蔵書印が並んで押されているものがあり〔挿図8〕、大正六年の東京高等工業学校工業図案科廃止から同十年の東京高等工芸学校設置までに数年の間隔があいているにも拘らず、蔵書にはその継承関係をはっきりたどることができ。これらの蔵書が他の学科(染織・窯業・応用化学・機械・電気科)からは切り離されて別置され、蔵前から芝浦、松戸、西千葉と継承されてきたらしい。この間、芝浦の校舎は一九四五年五月二十五日に空襲で全焼したもの、図書館が耐火構造であったことが幸いして焼け残るという僥倖にあづかっている。

本書巻末に掲げた図案集目録のほかに、蔵書には海外のデザイン指導書も含まれている。千葉大学附属図書館が平成十二年度に実施した「日本近代デザインデータベース」作製事業において整理した調査成果を利用することができたので、これによって判明した十九世紀後半から二十世紀初頭のデザイン指導書を刊行年順に挙げると次の通りである。

Wyatt, M. D. The industrial arts of the nineteenth century : a series of illustrations of the choicest specimens produced by every nation at the Great exhibition of works of industry 1851, vol. 1, 2, London, 1851.
Waring, J. B. Masterpieces of industrial art & sculpture at the International Exhibition 1862; chromolithographed by and under the direction of W. R. Tymms A. Warren and G. Macculloch from photographs supplied by the London Photographic and Stereoscopic Company taken exclusively for this work by Stephen Thompson, vol. 1-3, London, 1863.

Guichard, E. La grammaire de la couleur, tome. 1-3, 1882.

Japanische Vorbilder : ein Sammelwerk zur Veranschaulichung japanischer Kunstprodukte aus den Gebieten der Aquarell-Lack und Porzellanmalerei der Bronzetechnik und Emailierkunst der Stickerei
Weberer Schablonentechnik : 50 Tafeln nach japanischen Originalmustern / herausgegeben von H.

- Dolmetsch, - J. Hoffmann, [1886].
- Havard, H. Dictionnaire de l'ameublement et de la décoration depuis le XIII^e siècle jusqu'à nos jours, tome. 1-4, [1890].
- Jackson, F. G. Theory and practice of design: an advanced text-book on decorative art, London, [1894].
- Meyer, F. S. A Handbook of Ornament, 3rd English ed., London, 1896.
- Wormum, R. N. Analysis of Ornament : characteristics of styles : an introduction to the study of the history of ornamental art, 10th ed., London, 1896.
- L'imprimerie Chaix dir. Les maîtres de l'affiche, vol. 1-3, 1896.
- Bauwens, M., Hayashi, T., La Forgue, Graefe, M., Pennell, J. Les affiches étrangères illustrées, Paris, 1897.
- Day, L. F. Ornamental design embracing the anatomy of pattern : the planning of ornament ; the application of ornament, 4th ed., London, 1897.
- Crosskey, L. R. Elementary perspective : arranged to meet the requirements of architects draughtsmen and students, 1898.
- Hasluck, P. N. ed. Decorative designs of all ages for all purposes, London, 1899.
- Hurst, G. H. Colour : a handbook of the theory of colour, 1900.
- Jackson, F. G. Lessons on decorative design, London, 1900.
- Day, L. F. Nature and Ornament I, London, 1908
- Jones, O. The Grammar of Ornament, London, 1910.
- つづには十九世紀後半のイギリスでH・コールやR・レドグレイブによって美術教育が改革されて以降の基
本図書が含まれている。例えば、ワートナム『装飾の分析』(一八九六)は科学芸術局の教科書として歴史装飾の
分析と体系化においてフランスの美術教育を凌ぐことになった図書であり、ジャクソン『装飾デザイン講義』
(一九〇〇)・『デザインの理論と実践』(一八九四)はともに同局教科書として編まれたものであった。また、
デイ『自然と装飾』(一九〇八)はレドグレイブの提唱した植物写生からデザインを生む手法を実践した先駆的



挿図9 『伊木図案集』

な図書である。ジョーンズ『装飾の文法』（二八五六）はイギリスにおけるデザイン教育のもっとも基本的な参考書であり、日本でもその後長く同じ位置を占めることになった。この蔵書を現在は東京国立博物館に所蔵されている製品画図掛の参考図書と較べると、後者がフランス語文献を中心としていたことと対照的である。この学校の前身である東京工業学校工業図案科の創設とその準備スタッフにとってイギリスの体験が格好の先行例として意識されていたためであろう。もちろん、明治政府の博覧会事業にとってはサウスケンジントン博物館とその実践こそは日本が目指すべきデザイン育成事業の目標であったことも考慮すべきであろう。一方で西欧的な生活用具とその装飾の基礎的学習を求め、他方で機械生産、輸出を意識した製品デザインという明治のデザイン教育の根幹が見えることにもなる。そのなかでは、製作意図や汎用性を表現するのに必ず図案が仲立ちをし、ありうべき製品の骨格を形作るのに主要な役割を担うことをこれらの図書から学ぶことができたと思われる。

さらに所蔵図案集を概観すると、出版社としてはここでもやはり芸艸堂が百三十三件と四割以上を占めているが、明治三十年代以降時代が下るにつれて深田図案研究所（名古屋）、大修堂書店（大阪）、ウインドータイムス社・集美堂・太陽社書店（東京）など版画の版元とはまったく無縁な出版社の刊行物が目につく。とくに深田図案研究所は東京高等工業学校助教授であった小室信蔵が明治四十一年に愛知県立工業学校に転任してから、同地で教え子の深田藤三郎（明治三十五年七月工業図案科卒業）と協力して創設した出版社で、ここに収蔵されている九種の図案集「挿図9」は同社の代表的な図案集である。これらの図案作家たちは多くが東京工業学校か工業教員養成所の工業図案科出身者であり、染織図案作家のように閉じられた世界の師弟関係で養成された人材とは自己形成や志向が異なっていた。かれらが実地にデザイン指導に携わったのは各地の工業学校や商品陳列館で、後者によって刊行された図案集は東京芸大にも所蔵されており、社会的要請の広がりを示している。

iii 京都高等工芸学校（京都工芸繊維大学）

この学校は明治三十五年京都市吉田に創設され、その後昭和五年に同市松ヶ崎の現在地に移転しずっと所在

地や制度のうえであまり大きな変動もなく今日に至っている。しかし、目録に見られるように図案集の所蔵数は極めて少ない。これは図案集に限ったことではなく、他のデザイン分野の和書も旧高等工芸学校蔵書は千葉大学と較べても格段に少ない。しかし、宮島久雄の綿密な調査によれば、同校が所蔵する創立草創期におもに武田五一の手によって購入された海外のデザイン指導書はかなり豊富に残されており、かつ保存状況も良好なようである。こうした差異がどうして生じているかの解明は将来の課題としたいが、遺されたうちには次のような精選された指導書が含まれている。この蔵書構成からは、伝統美を知悉していた武田であったがゆえに、西欧の優れた先例に学んでこそデザイン革新を遂げうるという意志を推しはかることができよう。

Grasset, La plante et ses applications ornaments, vol. I, 1896.

Wasmuth, E. Neue Malerien, Sammlung praktischer Vorbilder für die Werkstatt und Schule aufgeführt von hervorragenden Meister, 1898.

Verneulle, M. P. L'ornementation par la plante, Etude de la plante, son application aux industries d'art, Documents ornamentaux publiés sous la direction de Verneulle, 250 brodures.

Verneulle, M. P. L'animal dans la décoration ornemental, 1897.

Beauchair, R. Farbige Flächenmuster für das Moderne Kunstgewebe, Stuttgart, 1900.

Séguy, E. A. Les fleurs et leurs applications décoratives, 1902.

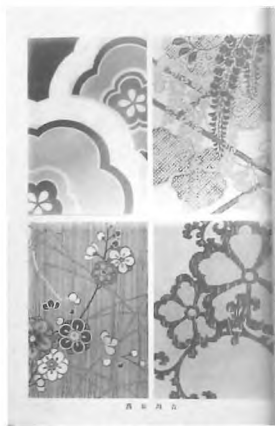
Weigner, Th. Studies from Nature and in Composition, Warnsdorf Bohemia.

Meurer, M. Italienische Majolica-Fliesen, Berlin, 1881.

Streitenfeld, A und L. Ausstattung vornehmer Wohnräume, Berlin.

Wasmuth, E. Die Tapezierkunst von F. Sauvage und Ad. Eckhaedt, Berlin, 1906.

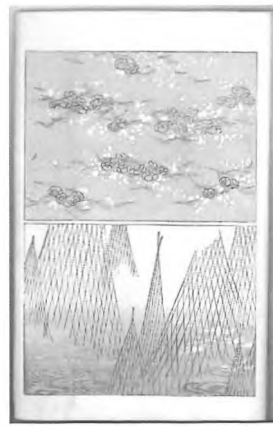
こうした同時代のデザイン指導書の充実した蔵書が形づくられる一方で、染織と陶磁器という根強い地場産業を抱える京都の図案集を取り巻く経緯を振り返っておきたい。幼時に岸竹堂についたこともある西村総左衛門の回想によれば、幕末明治初期には友禅の図案といえはありきたりの竹に雀、牡丹に獅子といった近世から伝承された雛形の再生産に終始していた¹³⁾。こうした時期の出版物は東京芸大所蔵本にも見出せる。しかし、



挿図11 吉川雅喬出品
（『第一回関西図案会作品集』）



挿図10 神坂雪佳「雪に梅の図・ほしあみの図」
（『新図案』巻の十三）



二 鹿島英二と『図案新集』

西村は維新以後パトロンを失った画家たち、例えば岸竹堂、望月玉泉、今尾景年らを説得し、染織下絵を描かせることに成功し、かつての本画が明治十年以降には友禪の下絵としてさかんに用いられていくようになった。十年代には文人画の友禪が流行したり、その後には写生派が流行し野村文挙、幸野楳嶺などが筆を振った。若き竹内栖鳳もこうした下絵描きに励んだ日々があった。この頃から、こうした図案家が職業的にも成り立ち、また古典的素養と現代的需要との橋渡しをする専門作家が業界からも必要とされるようになった。京都では辻宇助、加藤哲之助、菊地景石、下村玉広らが高名であった。明治二十四年には「図案の改良進歩を図る」べく新図案会が結成され、同会は毎月二十銭の会費で多色木版による彩色新図案帖を配布し、懸賞図案を募集し展覧会を催すことを主たる活動とした。その一部は機関誌『新図案』〔挿図10〕に掲載された。⁽¹⁾これに引き続き、友禪図案会（明治二十五年）図案精英会（同三十五年創設、三十六年京都図案会と改称）など明治後半には更に幾つかの図案作家の団体が結成され、その展覧会発表作品の図集が編集されるようになってくる。こうした事象は毎年繰り返される新柄の制作と広範な需要という多産少量生産の染織産業の構造に起因するもので、陶磁器業界にはこうしたシステムが形成されなかったのと対照的である。

これらの京都を拠点とする図案団体の展覧会目録形式の図案集は数が少ないながら、同図書館に所蔵されている。このうちもっとも多かったのは関西図案会〔挿図11〕のもので、同会は明治四十二年に京都図案会から分離した田村春暁らが中心となって結成したもので、やがて京都の友禪染作家の殆どを網羅するようになり、毎年展覧会を開催したが、大正八年に解散した。この会に限らず、この学校の図書館に収蔵されている図案集の殆どが染織向けに限られていることは学校創立当初の浅井忠や武田五一らのデザイン革新への壮図とは裏腹に、卒業生の供給先としての、また最大の地場産業としての染織業界への学内の関心のありようを物語っているようである。⁽²⁾また、明治四十年に浅井忠が急死した後は、谷口香嶠、神坂雪佳を中心とする伝統派への後退が図案集からも伺い知ることができる。



挿図12 『図案新集』送付封筒（表・裏）

図案集は大正二から八年にかけて鹿島自らが経営する図案新集社（東京市本郷区弥生町三番地）から発行され、全五六六葉というもつとも長大な内容を備え、千葉大学には大正二～六年の第一プレートから第三九一プレート（欠多し）が所蔵され、東京芸大にはこの初期の一年分を後に製本したものが所蔵されている。この図案集は書店販売ではなく、前金払いの予約購読者に毎月郵送する形式をとっていた「挿図12」。定価は一部二十八銭（郵送料二銭）で、解説シート一枚と図案シート六枚が一組で、後者には図版四十点程度が石版もしくはコロタイプで印刷されていた。内容的には、陶磁器・漆器・染織・金工・雑誌表紙・家具・ステンドグラス・建築など多岐にわたる分野がとりあげられている。図案としては前記の工業図案科卒業生を中心とした作家のオリジナル作品が多いが、農展その他のコンクールでの出品作品、受賞作品図版や海外雑誌・図書の口絵・挿図からの複写紹介なども多く含まれている。登場する同科卒業生と当時の職業を以下に掲げる。卒業学科は総て工業図案科である。

卒業年	学校	氏名	職名
明治三十四年	学 （学Ⅱ東京高等工業学校 *Ⅱ選科 養Ⅱ工業教員養成所）	宮下孝雄	東京府立工芸学校教諭
〃三十五年	養	安田祿造	東京高等工業学校教授
〃三十九年	学	宮本忠平	秋田県工業試験所技師
〃三十九年	学	中川義長	リブラン図案所（東京）、御木本真珠店
〃四十年	学*	国井喜太郎	村松合資会社（東京）
〃四十四年	養	日野厚	愛知県、神奈川県立工業学校
〃四十三年	学	伊木忠愛	東京府実科工業学校
〃四十四年	学	平石英一	岐阜県竹ヶ鼻工業試験所
〃四十五年	学	湯川左右	日本紙器会社、松屋呉服店

編集者の鹿島英二はこの分野の作家としては珍しく鹿児島出身であるが、父親は西郷軍兵士として戦死して



挿図14 『図案月報』第一号



挿図13 鹿島英二「便化図案」(『図案新集』より)

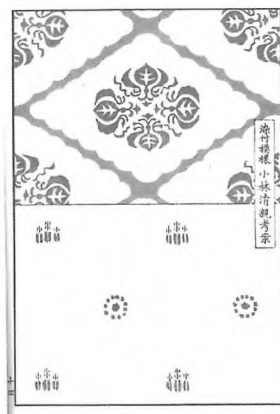
いる。詳細な経歴は後掲の年譜に譲るが、一旦教職について後、苦学してデザイン作家としての道を歩んでいる。明治四十〜四十二年にかけて農商務省海外実業練習生としてニューヨークに渡り、帰国の年から東京高等工業学校助教助教授となっている¹⁶⁾。この時期のデザイン作家として典型的な路といえよう。

鹿島は後年には帝展を中心として南画風な蠟染の作家として創作活動を展開するのだが、『図案新集』に自身で発表した図案では海外動向の紹介に努めた。それはアールヌーヴォーを始め日本でも流行のきざしていた分離派(マリゴールドなど)、バレエ・リュスや表現主義など多岐にわたり、自らの作風とは全く異質なスタイルにも手を染め、海外での体験を踏まえて図案作家としての腕を発揮している「挿図13」。

京都での同年代の代表的な図案家であった下村玉広の経歴を比較してみよう(199頁)。鹿島がそのデザイン作家としての素養を学校を通じて学んでいるのに対して、下村は京都の染織業界と密接な関係を持つ絵師の世界で学び、そのなかで頭角を現した。従って、図案の流通事業に関わることもないし、その経営に関与することもなかった。また、その美的な核心は伝統的図様に基づく新案の現代的展開にあったことは多くの作品集を見ても明らかである。

先の図案新集の作家の職業を見ると分かるように、鹿島だけでなく、工業図案科出身でデザインの世界を志すならば、この時代には官僚もしくは教員として指導者となるかデザイン作家として開業するかの路を歩むはかばかかった。それで、同校は学生に作家としての感覚のほかに、「誠実ニ実業ヲ執リ既知ノ知識ヲ応用スルノ意志¹⁷⁾」をもつことを期待していた。だから、時代感覚を生かした経営の感覚は卒業生に求められる才能の一部でなければならなかった。

明治十八年の製品画図掛廃止、納富らのその継承事業の挫折以後、工業図案科卒業生を中心とするこうした図案集出版に至る間にも民間業者による図案供給の試みはなかったわけではない。明治二十八年十二月に寺沢商舗は美術作家・工房に便宜を図るために『図案月報』¹⁸⁾「挿図14」を創刊した。同誌はこれまでのように外国向けに「形サへ変へレハ」いいのではなく、「実用ニ適セザル物又ハ外国人ノ忌ミ嫌フ図柄」を避けたり、海外で評価の高いデザインを紹介しようとしたのだった。このため、L・ゴンス、O・ジョーンズ、W・アンダーソンらの著作から図版を写して掲載している。二十九年十月には日本意匠会が結成され、「我国ノ工芸品、美術品



挿図15 小林清親「染付模様」(『意匠会誌』菊桐の巻)

ノ製作上ニ必要ナル意匠ノ発達ヲ謀リ応用ノ活動ヲ進ムル¹⁹⁾ことを目的とし、毎月課題を出して意匠考案を募集し優秀作を会誌『意匠会誌』「挿図15」に掲載しようとした。この背景には日清戦後の国民意識の昂揚と意匠条例公布という政策的な保護策の登場が考えられる。この事業内容は先に挙げた京都の『新図案』と極めて類似しており、こちらは対象分野を建築・庭園・金工・室内装飾にまで広げようとしている。両者ともが単行本でなく雑誌形式で時々のテーマによってコンクール優秀作を掲載するという手法と内容とが一致しているのが興味深い。つまり、発行者がすべての図案作者を抱えるのではなく新しい作家、内容を次々に募り、これがデザイン内容を常に革新するに効率的な方法になっているようだからである。こうした会費制の図案頒布という形式を鹿島は引き継いだのだろう。しかし、この日本意匠会はその後格別な活動歴を残すことができなかったようである。発行者の意図が正しくとも、それが民間需要に適應するには国内軽工業の発展がなお必要だったのだろう。

三 ひとまずの結論

図案集の登場と発展が一面において日本の印刷技術の水準と趨勢に左右されていることは岩切論文が指摘している通りである。印刷業界ならば原材料用品の供給から製品の流通に到るまでの産業構造が転換し始め、日清日露戦争後の日本社会を大きく変貌させていた。それは一方で経済構造の大きな変動であり、他方で意識構造としては近代的な国民意識の形成であった。こうしたなかで、『美術』はナショナリズムと西欧模倣の交替の波を潜り抜けて日本的な定位を実現しようとしていた。図案集が登場した時代はこうした日本の近代への離陸の時期に重なっている。それは一方で伝統の近代的変容の習熟として、他方で西欧新思潮の独自の解釈と適応として進行していった。またさらに、両者の均衡と習合に技と意を用いることで日本的近代デザインを実現する途に踏み入ることにもなったろう。しかし、大枠でこうした方向を展望しただけではそこに潜む時代のエネルギーと選択の重さを理解することはできないであろう。あるいは、時代の求める変容を図案集が体現していたとするならば、そこに何が見出せるかの実態的な腑分けがさらに進められなければならないであろう。我々のこのたびの調査はこうした努力へ向かうための前提をようやく見渡そうとする地点に立つことであつたよう

に思われる。それが達成できたかどうかは今後これらの素材を日本近代のいかなるテーマとして使いお世話かによってようやく判断できるのであろう。そのためには、我々に課された課題はきわめて重大であると思いを致すばかりである。

■鹿島英二略歴

明治	
7年 (1874)	鹿児島県川辺郡東南方村（枕崎町）に 鹿児島藩士孫兵衛の長男として出生
11年 (1878)	鹿児島藩士、西郷軍従軍戦死
22年 (1889)	川辺郡桜山尋常高等小学校補助教員
29年 (1896)	鹿児島県尋常師範学校卒業、鹿児島 県鹿児島郡吉田尋常高等小学校訓練 指導担本科正教員勤務 福岡歩兵第24連隊入営
34年 (1901)	工業教員養成所工業図案科卒業
34年 (1901) ～40年	富山県立工芸学校教諭
40年 (1907) ～42年	農商務省実業練習生としてニューヨ ークへ図案研究のため派遣
42年 (1909) ～大正元年	東京高等工業学校助教授
43年 (1910)	日英博覧会のためロンドンに出張、同 時に独・仏視察 日英博において「鼓樓装飾」が銀賞 牌を受賞
大正	
2年 (1913)	町田テイと結婚
2年 (1913) ～昭和8年	東京高等工芸学校教授
11年 (1922) ～昭和8年	商工省工芸展覧会審査員
昭和	
2年 (1927)	文部省より支那工芸視察に派遣
20年 (1945)	中華民国立北京芸術専科学校教授
25年 (1950)	東京都中野にて死去

■下村玉広略歴

明治	
10年 (1877)	下村米吉の長男として出生、生家は栗 田で伸銅業を営む資産家
13年 (1880)	小学校中退、陶画工の徒弟に
30年 (1897)	陶器輸出不振のため、友禅画工に転向
33年 (1900)	竹川友広について日本画を学ぶ
35年 (1902)頃	友禅協会公募に「霞」で一等賞受賞 錦袋帖刊行
39年 (1906)頃	宮崎竹僊、福岡玉僊を助手として業界 第一人者に
40年 (1907)	千枝子と結婚
40年 (1907)頃	富貴染を完成し、工場経営
41年 (1908)	長男好広誕生
大正	
11年 (1922)	図案家協会（京都）結成に参加し、第 一期幹事
12年 (1923)	図案家協会（京都）評議員 博覧会審査員
13年 (1924)	京都市染色試験場嘱託技術員
15年 (1926)	京都帝大大学病院にて死去

註

- (1) 雨宮昭一『戦時戦後体制論』（岩波書店、一九九七年） vi
- (2) 横溝廣子「〔解題〕『温知図録』の成立と構成」（東京国立博物館編『明治デザインの誕生』国書刊行会、平成九年）
- (3) 文部省実業学務局編『実業教育五十年史』（実業教育五十周年記念会、昭和九年）二四六～二四七頁、『東京工業大学六十年史』（東京工業大学、昭和十五年）四三九～四四四頁。
- (4) 平山復二郎「平山英三略伝」（『帝国工芸』第四卷第十号、昭和五年十月）、緒方康二「明治とデザイン——平山英三をめぐって——」（『デザイン理論』21、一九八二年）、『海外実業練習生一覽 附海外実業視察員一覽』（農商務省商務局、明治四十四年）。
- (5) 東京美術学校所蔵職員履歷書。島田は明治三年七月十四日金沢生まれ、景洲と号した。この顚末は拙稿「無名と非命」（『一寸』十五号、二〇〇三年七月）を参照。
- (6) 福地復一の談話『東京芸術大学百年史』東京美術学校篇 第一卷（ぎょうせい、昭和六十一年）四六〇頁。
- (7) 『東京工業専門学校要覽』（同校、昭和二十一年度）二～四頁。
- (8) ステュアート・マクドナルド（中山修一、織田芳人訳）『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、一九九〇年）十二章。龍池会系の人々によって編まれた『日本之美術』（雲根堂、明治二十一年）を見ると、徳久恒範の題字には「仏国之富者在美術之教育 独逸人之語」とあり、彼らの間には明治後期とは異なつてフランス美術への思いが強かつたようだ。
- (9) 例えば、明治二十一年十月二十五日の関西二府十五県連合共進会褒章授与式での講演で、「若年ノ者ニ画ヲ教ヘテ味ト美術心トノ思想ヲ養成スル」方策を推奨し、「英国ニ於テハ画ヲ教授スル学校ハ殆ント数千ヲ以テ算スル」と紹介している。ワグネル「ワグネル氏ノ工業ノ方針 第一」土屋喬雄編『G・ワグネル維新産業建設論策集成』（北隆館、昭和十九年）五六六頁。
- (10) 緒方康二「明治とデザイン——小室信蔵（1）——」（『デザイン理論』19、一九八〇年）
- (11) 商品陳列館は明治四十五年には北は北海道から南は沖縄まで五十二館が活動していた。『商品陳列館報告』第五十二号（明治四十五年六月）
- (12) 宮島久雄「武田五一の図案教育——京都高等工芸学校図案科史2——」（『京都大学文学部美術史研究室紀要』第十九号、一九九八年三月）
- (13) 織田萌編『染織図案変遷史』（毛斯繪協會、昭和四年）二〇～二二頁。
- (14) 中安信三郎編『新図案』巻の十三（新図案会、明治二十五年一月）による。なお、同号をみると、藤村新治郎彫刻、

高木源助印刷とあり、体裁は和綴じで全頁木版刷りで、図版は多色木版である。

(15) 拙稿「近代日本におけるデザインの創成」『松岡壽研究』中央公論美術出版、平成十四年(一九九四)三九四～三九五頁。

(16) 自筆履歴書

(17) 『東京高等工業学校要覧』(同校、明治三十四年・三十五年) 十二頁。

(18) 『図案月報』第一号(寺沢商舗陳列館、明治二十八年十二月)。同商舗は京橋区南金町に所在し、印刷は築地活版製造所が行い、文字は活版、図は木版で印刷されている。また、同誌が挙げている参考図書は次の六点で、かなりの専門知識の持ち主によって選択されていることが分かる。Gonse, L. L'art japonais, 2 vol, Paris, 1883. Bowes, J. Japanese Enamels, with illustrations from the example in the Bowes collection. Liverpool, 1884. Audsley, G.A. Ornamental arts of Japan, 2 vol, L., 1882-1884. Bing, S. Artistic Japan: a monthly illustrated journal of arts and industries, L., 1888-1891. Jones, O. Examples of Chinese ornament selected from objects in the South Kensington Museum and other collection, L., 1867. Anderson, W. The Pictorial Art of Japan, L., 1886.

(19) 『意匠会誌』菊桐の巻(日本意匠会、明治二十九年十一月)。図版は全頁が杉崎婦四之助による多色木版刷りである。

明治・大正図案集の研究

——近代にいかされた江戸のデザイン

平成一六年二月一五日 印刷
平成一六年二月二〇日 発行

編 者 樋田豊次郎／横溝廣子

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村一―三―一五
電話 〇三(五九七〇)七四二二
FAX 〇三(五九七〇)七四二七
<http://www.kokusho.co.jp>

印刷 株式会社エーヴィスシステムズ
製本 有限会社青木製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-336-04625-3